



広重徹君のこと

村田 全

科学図書館ブックレット

科学図書館

広重徹君のこと

村田 全

広重徹君が亡くなってまだ三カ月にしかならない。多方面にわたった彼の業績を客観的に、批判するどころか概観することさえ、もとより私の任ではないが、それにしても現時点ではまず誰にも望めないことであろう。そのような仕事は、現在の既成の科学史家への課題とするよりも、むしろ彼の仕事に触発され、それを継承し、やがてそれを超克していくであろう将来の研究者への宿題とすべきものと思われる。私はただ、科学史というこの若い学問をめぐるの、たぐい稀な——と、少なくとも私には思われるところの——彼と私との人間的つながりの中から、何かしら客観的意味のありそうなことを、想い出すままに書きつらねるにとどめよう。

1 広重徹 略年譜

- 1928年 8月28日 兵庫県神戸市に生まれる。
- 1941年 3月 神戸市立雲うんちゅう中ちゅう小学校卒業。
- 1941年 4月 神戸一中（旧制）入学。
- 1945年 3月 （戦時中の臨時措置により4年で）同校卒業。
- 1945年 4月 大阪高等工業学校に入学。まもなく退学。
- 1946年 4月 第三高等学校（旧制）入学。
- 1949年 3月 同校卒業。
- 1949年 4月 京都大学理学部物理学科（旧制）入学。
- 1952年 3月 同学同科卒業。
- 1952年 4月 京都大学大学院（旧制）に所属。
- 1957年 6月 日本大学工学部専任講師。
学位論文「Lorentz 電子論の形成と電磁場概念の確立」。
- 1967年 6月 日本大学工学部助教授。

1973年10月 同教授。

1975年 1月 7日 癌のため横須賀市民病院で死去。

2 神戸一中理化研究会

広重君と私との交際は、彼が神戸一中に入学した1941年に始まる。私は当時、最上級の5年生で、理化研究会(通称、理研)と呼ばれるサークルのメンバーであったが、彼は入学後まもなくこの会に入会した。これが彼と私との宿命的な出会いである。

当時の社会環境の中で、純粋な自然科学などの文化活動はあまり歓迎されていなかった。特にわれわれの中学では、「理研」は学校当局からしばしば迫害に近い扱いを受けた。客観的な例として、私の手もとに残っている日米開戦直後(1942年1月)発行の校友会誌『暁鐘』を挙げると、運動部はもちろん、「楠公^{なんこう}会」¹⁾、「博物学会」などという文化団体の活動報告は出ているのに、「理研」の報告は見当たらない。私の記憶では「理研」の報告が載せられるようになるのはその次年度からで、それまでの十年以上に及ぶ活動にもかかわらず、「理研」はなお公認団体ではなかったらしく、その活動にはしばしば掣肘^{せいちゆう}が加えられていたのである。

私がこうした些事にこだわるのには理由がある。その第一は、「理研」への待遇の好転が、ノモンハンにおける日本軍の惨敗以後、政府や軍部が近代戦における科学技術の意義を認めた時期と、奇しくも一致しているという事実である。これはことによると日本中等教育史の一コマとしての意味さえもちうることもかもしれない。その第二は、「理研」でのこの経験がそのメンバーに一種の反骨精神を呼び起こしたことである。実際、同会の旧メンバーには今もなおそのような精神的骨格

1) 楠木正成の敬称。

を失っていない人が少なくない。広重君の時代には既にそうした「迫害」はなかったと思うが、それでも伝統的雰囲気は確かに残っていた。彼がやがて物理学界、科学史学界、更には広く学界一般の中で、学問的科学史学確立のためにしばしば示した反骨的行動は、その一つの淵源を、ことによるとその辺に持っていたのかもしれない。第一の件はしばらくおくとして、以下もう少し「理研」の活動について述べてみよう。

いま思い返しても不思議なくらいだが、当時の「理研」には伝統的に、学校当局や世間の風潮に反抗的な自由思想と、純粋な学問への思慕があった。たとえ無意識にせよ、そうしたものへの萌芽が確かにあった。私たちのクラスは、4期上のクラス(そこには戦時中、東大で実験中に事故死した大段政春氏もいた)から、ポアンカレや寺田寅彦などの書物を教わり、私はそれに天野清の『熱輻射論と量子論の起源¹⁾』、ラーデマッヘル-テプリッツの『数と図形』、山内恭彦『代数学と幾何学』などを加えて、次のクラス以下、広重君たちのクラスにまで伝えた。それらはかなりの間、「理研」での必読書のようになっていたらしい。また当時の会員で、創刊当時の『科学史研究』を今も保存している人が何人かいる。もちろんそれらの書物がすべて理解されたとも思えないが、その影響は決して小さくなかったであろう。別に、出藍しゅつらんの誉れ²⁾という言葉の典型的な例としていうと、私が中学5年生のとき行った微分積分学の講義(!?)の聞き手の中には、広重君の他、彼と同期の神戸大教授、村上温夫(関数方程式)、広島大教授、松島竜太郎(基礎医学)、某電機メーカー研究員、猪口敏夫などの諸君がいる。

広重君について特に忘れられないのは、彼がこの会の「会誌」に書いた「論文」である。この会では毎年二度、ガリ版刷りの「会誌」を

1) PDF 版を「科学図書館」に所蔵。http://fomalhautpsa.sakura.ne.jp/Science/AmanoKiyoshi/netufukusha-ryosiron-kigen.pdf

2) 弟子がその師匠を越えるほど優れている。

出していたが、彼は、中学2、3年の頃に書いたフロジストン¹⁾ 説やエネルギー不滅法則に関する記事の中で、質量とエネルギーの同等性に言及し、“こうなるとエネルギー不滅法則はもとのままではなりたたないが、質量—エネルギー不滅法則とすれば、それは依然として成立するのではあるまいか(下線村田)”と結んでいた。北大予科の学生だった私は、それが知識としてでなくオリジナルな推測として述べられていることに完全に舌を巻き、彼に賞讃の手紙を書いた記憶がある。

こういう活動の一方で、「理研」のメンバーには、しばしば、受験の^{げんがくてき}ことを含めて学校の正規の教科に背を向ける傾向があり、^{げんがくてき}銜学的と評されるような鼻もちならぬ空気もなくはなかった。広重君の次の世代のメンバーであった江戸頌昌(中原佑介)氏が、それを痛烈に批判した記事も残っている。しかし全体的に見て、その精神的雰囲気は当時の中学生としては例外的に高いものだったと思う。学校側の「迫害」がこの気風を危険視したためとまでは思わないが、それが若い心に反発をうながし、その眼を覚まさせるのに一役買ったことは事実であろう。

ここで、当時、少なくとも広重君や私などの周辺の市民の間に潜在していた自由主義的、ないし反国家的な雰囲気についても一言しておいてよいであろう。その第一は、たとえ一部にもせよ、中学生の間にすらあった面従腹背的反軍思想である。少なくとも「理研」にはそれが潜在していた。自分の場合で言えば、私は当時、天皇と軍部に深い憎悪を懐いており、ただインテリ予備軍の悲しさで、マルクス、エンゲルスから^{いのまたつな}猪俣都南雄²⁾などに到る一連の禁書^{てさぐり}の手探りの読書、芥川を介して芭蕉やボードレールなどに^{わた}亘る没時局^{たんでき}的書物への耽溺、そしてポアンカレ流の「学問のための学問」なる思想への傾斜——何とい

1) Phlogiston 「フロジストン」とも。燃焼を説明するために導入された仮想上の物質。燃焼とはこの物資が逃げ出だす現象であるとしたが、ラヴォアジエによって否定された。

2) 1889-1942。社会主義者。日本共産党の結成に参加した。労農派の論客として、野呂栄太郎などの講座派と日本資本主義論争を展開した。

う矛盾に満ちた読書！——などによって、わずかにその鬱憤^{うっぶん}を晴らしていた。ただ私といえども反国家的思想は堅く秘していたから、これについて私が広重君に影響した点はまずないと思う。それよりも、もし私の周辺で彼の上に影響した何事か^{なにごと}があったとすれば、それはむしろ私の祖父であろう。祖父はつねつね私に天皇の軽侮すべく軍の憎悪すべき所以^{ゆえん}を説いていたが、たまたま私の留守中に訪ねてきた広重君にも同様のことを話したらしい。戦時下のそうした話の印象はきわめて強烈で、深い感銘を受けたと、ずっと後になって彼が話してくれたことがある。もう一つ、これは「危険思想」のことではないが、彼が、父君の影響で早くから世界史に親しんでいたことも忘れられない。私は中学2, 3年生の彼のその方面の知識の的確さに驚き、その知恵の源としてヴァン・ルーン（前田晃訳）『世界人類史物語』を教わった。この本は彼が小学6年生の頃、父君に買ってもらい、繰り返し読んだ本だという（通夜における父君の回想による）。広重君の科学の社会史への関心は、この辺に一つの深い根をもっていたのであろう。

3 同人誌《Ray》のこと

私は中学卒業後、一年浪人して北大予科に入学したが、広重君達との交際は、むしろその頃から一段と深くなった。浪人中、中学へ出かけて彼らに物理学史の連続講談をしたこともある。今となると冷汗ものだが、広島文理大のある先生の『物理学思想史』という小冊子を種本にし、それに天野清氏の書物や、初めの部分だけを読んでいたド・プロイの『波動力学』等も交えたと記憶する。更に北大在学中の夏休みには、その話の改訂増補までやった。このときはスレーター - フランクの *Intoduction to the Theoretical Physics* の初めの数章も利用したと思う。

このようなつながりの中でも、広重君は家が近かったため（彼と私、

それに大段政春氏は偶然にも同じ小学校で同じ先生（故井上権作先生）に教わっている）、私の浪人時代も、彼は前記の村上君とともに実に頻繁に私の家へ来て、夜おそくまで話しこんでいった。しかも今思い返しても不思議なほど、現世的なことは語らなかった。外国語の勉強を（自分の不勉強は棚に上げて）強く勧めた他は、話題は完全に数学、物理学、それに哲学らしきものに限られていた。しいて言えば、私の好んでいた芥川、芭蕉、フランス文学などを話題にしようとしたことはあったのだが、それには彼らの方が乗ってこなかった。“村田さんの文学趣味だけは、とうとう理研に定着しなかった”と、彼は後年私に語ったことがある。

当時の中学は5年制であったが、戦局が急を告げるとともに4年制に切りかえられ、彼は4年で中学を卒業した。彼はその年、五高¹⁾——寺田寅彦の母校を受けて落ち、大阪高工へ入った。しかし、戦争中で浪人は徴兵につながる危険があったにもかかわらず、彼は、工科はわが道ではないとあって、敗戦前に退学してしまった。当時、理科生の徴兵猶予で北大に在学していた私は、手紙で慎重考慮を勧めたが、彼は聞き入れなかった。この辺に彼と私との芯の強さの差があるようである。

その後、三高²⁾、京大と進んだ時の彼のことは、私以外に多くの人が語ってくれるであろう。実を言うと、しばしば手紙を往復していながら、私は彼が民科³⁾の活動をあれほど積極的にしていたことを知らなかった。そこに到った精神的遍歴の経路もほとんど記憶していない。ただ時折、学問を散漫にしないようにとの意味の手紙を書いたことがあるが、今にして思うと、それは杞憂^{きゆう}だったわけで、ここにもまた彼

1) 熊本に設立された旧制の第五高等学校。現在の熊本大学の前身。

2) 旧制の第三高等学校。いまの京都大学の教養課程。

3) 「民主主義科学者協会」の略称。1946年1月12日、小倉金之助を会長として発足。科学の民主化を標榜して進歩的文化人や一般市民・学生なども加入して活動を続けた。

と私との関心ないし馬力の差が見られるように思う。私の方は敗戦とともに社会科学への関心を著しく失っていたのである。

ところが、そうした活動の半面、彼は「理研」とのつながりを忘れていなかった。かつて私が彼らにしたように、彼とその仲間は次の世代に働きかけていた。また村上君(当時、阪大理学部学生)と、吉田耕作『物理数学概論』などの輪読もしていたと聞いた。

彼らと私などが中心になり、「理研」の卒業生をメンバーとする「理研旧人会」——この奇妙な名は私がつけた——なるものを作って、《Ray》というガリ版刷りの同人誌を発行したのもこの頃である。《Ray》という名は、私の4期上の人たちが最初に出した、現存最古の理研会誌の名である。彼がそこに続々と発表した論文には、やがて『科学史研究¹⁾』の中で結実する物理学史研究の原型ないし過程が見いだされるかもしれない。後年の筆まめで几帳面な彼の性格も、この頃にはもうはっきりした形をとっていた。ついでにいうと、私はこの雑誌に、ボレルの『関数論』の翻訳を連載した。すなわち、これはまた私の数学史研究の一つの源にもなったのである。(この雑誌は、旧理研の会誌とともに、ほぼ完全に保存されている。)

4 日大でのコロキウムのことなど

1955年、彼は《Relativistic wave equations with maximum spin two》という論文の別刷を私に届けてくれた。その時、彼が「これは読んで頂かなくて結構です。ただしこれは僕の物理学に関する最後の論文です」と言ったのは忘れられない。数学と哲学とそれらの歴史との間で長いあいだ立ち迷っていた私と違って、彼はこの時点で、はっきり専門の科学史への道を歩み始めたと言ってよいであろう。

私は1952年、新婚早々、高崎短大に赴任したが、その後も彼は「東京へ来たついで」などといって、何回か訪ねてくれた。新婚旅行の途

中とって夫人と一緒に来たこともある。その後、私は立教大学に移り(1956)、彼も日本大学に勤めるようになって(1957)、空間的距離は近くなったが、互いに家庭もちとなったためか、この頃から昔ほどの往き来はしなくなった。ただ会うと長話ながばなしになるのは昔のままで、話の対象もほとんど変わらなかった。一度私が、東京に住むなら早めに家を建てた方がいいよ、というようなことを言ったら、「村田さんもそういうことを言われるようになりましたね」という答えが返ってきたくらいである。ただ社会の反動的な動きについては、互いに同憂する機会が多くなり、私はしばしば彼の読みの深さに打たれた。彼が私にとって、何人かの友人の一人というよりも、この世で得た最も信頼し敬愛すべき友となったのは、ほぼこの時期のことである。

この頃、年代は定かでないが、辻哲夫氏と三人でラテン語の勉強会を始めたことがある。テキストはデカルトの『哲学原理』であった。この時、私は健康上の理由で脱落したが、会自身は何年か続いたと聞く(1963年ごろまで)。一方、科学史の論文を読むコロキウムが(辻氏のメモによると)1959年に始まっている。この会でどんな論文が読まれたかは、彼の仕事を分析するのにかなり重要な資料になると思うが、その記録は幸いに彼の手で丹念にとられている。私が自分の進路を最終的に決定する機縁となったサポーの大論文「ユークリッド公理系の始原¹⁾」にめぐりあったのも、その会で彼に紹介を頼まれたのがきっかけである。

この頃、二人で数学と物理との境界領域の書物——たとえばサイバネティクスや情報理論など——を読もうかという話も二三次出た。しかしこれは、私が健康を害していた時期だったため、当分——そして結局は永久に——見送られてしまった。

私達はまた、いつか共同の著作をしようという話もした。そして実際、

1) Á. Szabó. *Anfänge der griechischen Mathematik*, München-Wien, 1969.

年とともにその可能性は大きくなるかに見えた。私が筑摩書房を扇動して彼に編集してもらった『科学史のすすめ¹⁾』——私はその一章²⁾を書いた——、私が監修していたル・リヨネ『数学思想の流れ³⁾』——彼はその内の四つの章を訳してくれた——、それに『数学セミナー』誌での国際科学史会議に関する対談(『数学史の世界』玉川大学出版部、1977所収)などは、その最終目標のための一歩だったとも言ってよい。しかし私たちが一番書いてみたかったこと、すなわち19世紀から20世紀初めにかけての数学と物理学のからみ合いの歴史は、ついに日の目を見ないでしまった。もちろんそれはまだ計画の段階ですらなかったし、私がおのその仕事のために適任だとは思えないが、ともかく彼がそのために他にかげがえのない人物だったことは、誰の眼にも明らかであろう。

5 日本科学史学会のこと

広重君は学生時代に日本科学史学会に入会し、そこを舞台に、はなばなしい活躍を始めたが、私は長いあいだ入会もせず、また欧文誌の編集委員を委嘱されたのを除いて、学会の仕事もほとんどしなかった。彼が「雑務はこちらで引き受けますから、村田さんは勉強しといて下さいよ」と言ってくれるのをよいことにしていたのである。そうしたことが彼をますます疲れさせる一因になったかと思うと恥ずかしい。もっとも、彼は私のその方面での無能ぶりをよく知っていたから、あえて私を誘いこまなかったのかもしれない。しかし私の方も、だんだん学会の事情が分かってくるにつれて、彼を盛り立てて陰ながら役に立つくらいの覚悟はしていた。ただ、彼を私よりずっと健康と思っていたのが、今にして思うと実に大きな誤算だったのである。

科学史学会の雰囲気に関連して、私にはこんな経験がある。それは

1) 広重徹編『科学史のすすめ』(学問のすすめ 18)、筑摩書房、1970年10月。
2) 「論証的学問の性質」

東京の郊外で行われたある年の年会の帰りのことで、偶然、電車で一緒になった二人の人——その名は誰にも言っていないし、その一人の名は完全に忘れた——から、「広重体制の打破」を誘われたのである。私は直ちに、自分が彼の古くからの同志であることを述べ、その話を聞くのはかまわないし、またそれを誰に言おうとも思わないが、その計画には反対するだろうと言って、いささか気まずい思いをしたことがある。広重君の科学史研究が本筋の堂々たるものであることを疑っていなかった私は、科学史学会の外部からならともかく、学会内部にそれに対する根本的な反対運動——学問上の論戦ではなく——のあることなど、それまで考えてもいなかった。その意味で、その小事件によって科学史学会の体質の一端を覗けたことは幸いだったが、それとともに改めて広重君の骨折りの大きさを考えた。

学会の体質について、もう一つ思い出すことがある。これは、彼の編集した『科学史のすすめ』の合評会でのことだから、記憶しておられる方も多いであろう。このとき、学問としての科学史を強調する著者側の姿勢そのものに対して、一部から根本的な反対と思われるものが持ち出されたが、彼はそれに対して、これは誰よりもあなた方に読ませるための本だ、と明確に言い切った。私はその時の彼の^き生まじめで、事をはぐらかさない姿勢に改めて強い感銘を受けたが、それとともにここでもまた、科学史学会を底流するらしいある種の没学問的傾向を垣間見た気がして、深い失望を覚えずにはおれなかった。試みに私から見たその傾向の二三を特記すれば、第一は趣味、物好きの「科学史」への傾斜、第二は学問的裏づけを欠いた通俗化の傾向、そして第三は、実証的研究をなおざりにしたまま、公式的な史観あるいは科学観によって安易に一般論を展開しようとするドグマ的傾向、というようなことになるであろう。

ところで広重君の仕事を大別すれば、最も学問的な物理学史研究、そ

れに基づく科学史一般についての考察、更にそれらを包んで、遺著『科学の社会史』などに見られる社会的視野をもった研究の三つになると思われる。しかし私は、私自身の傾向のせいもあるのだろうが、その中では第一の学問的研究こそ、彼の活動を最も深いところで支えているものだと考えている。科学史の研究は、歴史学の知識、方法とともに、対象たる個別科学に関する或る程度以上の理解がないと、やれないものである。しかもそれは、科学史学に固有な方法をもって行わねばならない。もとよりこれは私にとっても理想であって現実ではないが、いずれにしても、広重君と私の(対象こそ違え)共通の信条だったものであり、日本における科学史研究の方向は、この意味で、広重君の仕事を精神において継承し、やがて内容においてそれを超克していくことのほかにないだろうと、私は考えている。

6 第14回国際科学史会議

とうとう最も悲しい出来事について書くときが来た。

1972年4月から二カ年余りを、私はパリの「科学史・科学哲学研究センター (Institut Alexandre Koyré)」で数学史の研究に従事した。元来はもっと早く行くはずだったが、諸般の事情によって予定よりおくれ、ちょうど第14回国際科学史会議の準備期間にかかってしまった。もちろん私とても、この会議に我関せずだったわけではなく、広重君からの依頼で、小堀憲先生を助け、専門委員として数学部門の編成に関与した。しかし在日の諸氏の御苦勞とは当然かなりの差があったわけである。

ところがその1972年の晩秋、彼は突然吐血し、しかもそのときすでに癌が発見されていたのであった。ただし癌のことは、病気への影響をおもんばかって彼には知らされず、結果として国際会議の準備委員にも知らされなかった。万事は彼の健康を思つてのことだったが、結

局それは裏目に出たわけである。もっとも、夫人はパリの私にだけは知らせようかと考えられたらしいのだが、万一手紙が事故で返送されて彼の目にとまったら、という点が心配で、その手紙はついに書かれなかったという。広重君からは、吐血して死にそこねたということと、「村田さんがそばにいてくれたらと思うことがある」という意味の手紙が来たが、一応快癒ということで、私もともかく安心してた。私自身ずいぶん忙しい生活だったが、もしそのとき彼の病気の性質を知っていたら、私は即刻帰国して彼の負担軽減を図ったことであろう。それでも効果はなかったかもしれないが、この点は私の生涯の悔いとなって残るに違いない。実際、癌の手術後二年を療養専一に過ごした人は、生きのびる率が高いといわれている。その重大な二カ年を彼は国際会議のプログラム委員長の劇務の上に、総決算的な長篇の英文論文をまとめ、『科学の社会史』をまとめ、更に『アインシュタインの生涯』の改訳までを仕上げるのに費したのである。それらの仕事は彼の死を早めたに違いない。それとも彼は自らの運命を予感して、あえてあのように先を急いだのであろうか。

1974年8月、国際会議のレセプションの合間に、夫人から彼の病状を聞いたとき、私は血の凍る思いがした。ただ彼はそのころはなお元気だったし、それにすでにほぼ二年が経っているということで、そこに希望をつないでいたのだが……。11月5日に入院したとの電話。それでも11月下旬には中旬より元気になっていて、この次のエディンバラの国際会議へは、今度はお客様としてお互いによい仕事をもってこうなどといい、回復後の外遊にそなえてドイツ語の勉強までしていた。いずれにしても、その気力には非常なものがあつた。しかし一旦退院のあと、12月28日に再入院した時は、もうほとんど口もきけなかった。12月29日に見舞ったとき、彼が「歩きたい」という意志表示をし、私は彼をだいて車椅子にのせて病院の廊下を一周したが、

それが生きた広重君の見おさめであった。あれだけの仕事を背負ってきた彼の体重の軽さに、私は心の中で暗涙にむせいだ。私の近く出す『数学史¹⁾』のゲラ刷りを、彼は再入院まで枕頭ちんとうにおいていてくれた由、すでに不本意なところの多々現れている書物だが、それに対する彼の批評もまたついに聞くことができなかった。

実をいうと、私たちの長い交際の中で、一度だけ彼のむっとした顔を見たことがある。それは例の国際会議の初日のことで、私が何か小さなことを事務職員に頼んでうまくいかず、苦情をいった時のことである。彼が、それくらいのことは自分でやってくれと言おうとしたのは、目に見えていた。むしろ「村田さんもうとうとうたいか大家のような顔をしましたね」といったかったのかもしれないと思えた。しかし私の本心は、彼が何もかも自分でやってしまうことに対して苦情が言いたかったのである。そもそも専任の事務局すら持てない貧乏学会が、国際会議などというお祭りを背負いこんだこと自体、私には解げしかねたが、それにしても、事務局の不備を不備のままにして責任者が何でもやってしまうと、事務局はいつまでたっても育たない。翌日だったかに、「君がむっとしたのは分かっていたが、僕の言いたかったことは分かるはずだ。国際会議なんてお祭り騒ぎと心中するなんて、もっての他だよ」と言ったら、彼は苦笑していた。国際会議が一から十までお祭り騒ぎだとは私も思わないし、幸いに今回の会議は多くの人の努力によって全般的に成功だったと思う。しかし私はそんなことよりも、彼を失った損失の方が、日本の科学史学界の将来にとって遥かに重大だと思わざるをえない。もしそこに少しでも慰められることがあるとすれば、それは、あの機会に日本の若い人たちが学問的な科学史への意欲を燃やし始めたことであろう。そして彼もまたこのことを第一に考えていたようである。会議中は彼を牽制する意味で、しきりに「お

1) 『数学史』（筑摩数学講座 18, 筑摩書房, 1975年4月）

祭り騒ぎ」という言葉を連発したので、11月に見舞ったとき、解毒剤のつもりで、(フランスの)タトン教授が「立派な運営だった」と真顔で賞めておられたこととともに、若い人たちの反応のことを知らせたら、彼は本当に嬉しそうであった。彼の元気なうちにこのことが伝えられたのは、せめてもの幸いであった。

それにしても、学会の運営がしばしば少数の人の犠牲によって行われ、直接にせよ間接にせよ、時として今回のような事態を招くとすれば、それはこのまま放置してよい問題か否か。そもそも学会とはそんなにまで大切なものなのであろうか。また大切だとすれば、その維持経営をどうすべきなのか。一度、学会自体の存在意義にまで立ち帰って考えてよいことのように思うが、いかがであらうか。

ともあれ、若い人びとへの宿題ということで始めたこの小文が、もう一度若い人びとの話になったところで、私はこれを切り上げようと思う。もし来世というものがあるならば、私は今度は、彼に教えられ、期待され、やがて彼を踏み越えてゆく若い人の一人でありたい。

[付記]

『自然』4月号に山田慶児氏は、私が広重君のことを「慈顔の阿修羅」と呼んだことについて書かれた。少し場違いかとは思いますが、これに関連して一言つけ足すことを許されたい。

奈良の興福寺の三面の阿修羅は私の最も好む像である。十年ばかり前、私は久しぶりにあの前に立って、いくつかの我流の和歌を並べたことがある。それらは元来、広重君と何のつながりもなかったものだが、今となると、彼の面影に何かしら一脈通い合うものがあって、私は彼の通夜以来しばしばそれを思い出す。次にそれを節録させて頂こう。

おもて三つ 持てる心の かげろいを
 身にたぐえつつ 阿修羅に対す
 かたわらを かえりみる眼の きびしさを

わが目守りつつ 阿修羅に対す
悲しみは たたかいの身を ひたぶるに
千とせ いのりて 立てる阿修羅ぞ
よしさらば 阿修羅のごとく いのるべし
われにや来たれ かれのまなざし

(『科学史研究』第2期第14巻, 1975 夏号)

-
- ・『数学と哲学との間』（玉川大学出版部，1998年12月）所収。
 - ・原著にはない「脚注」をつけた。
 - ・適宜振り仮名をつけた。
 - ・PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内，その他「科学図書館」

に関する意見などは，

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>